

平和を 引き継ぐ語り継ぐ



長崎に投下された原子爆弾ファットマンの実物大模型（新潟の譲渡式にて）

墨田 平和のバトン新潟へ ファットマン模型を譲渡



講演する大石又七さん（左）と市田真理さん

大石又七さんが遺したものの

第五福竜丸展示館学芸員 市田真理

アメリカによるビキニ環礁での水爆実験で被曝した大石又七さんが今年3月に亡くなりました。講演活動を共にした学芸員の市田真理さんに寄稿いただきました。

第五福竜丸乗組員だった大石又七さんと、第五福竜丸展示館スタッフの私とが壇上に並んでお話しするスタイルを、私は勝手に「コラボ講演」と名づけていました。お手伝いするというよりは、「共に語る」「協働する」間柄でいたかったからです。

学芸員という職業は、本来墨子に徹するべきで、主役の

くなられました。

20歳の前日に マグロ船で被曝

大石又七さんは、静岡県吉田町出身。敗戦直後の1945年9月に父親を事故で亡くし、中学校を中退して14歳で漁師になりました。近海カツオ漁船を皮切りに経験を重ね、遠洋マグロ漁船第五福竜丸では冷凍士になります。漁船の出世コースで、将来を嘱望されていたのです。

1954年1月22日静岡県焼津港を出航。翌日は大石さんの20歳の誕生日でした。重労働の「はえ縄」作業を繰り返した足掛け8年。大石さんに共振しながらのコラボでしたが、いまはもう、私を震わせる主（ぬし）がいまません。大石さんは、3月7日87歳で亡

【墨田・塗表・林幸樹記】

東京土建墨田支部が長く参加協力している「すみだ平和原爆写真展実行委員会」が、保管していた長崎型原爆「ファットマン」の実物大模型を新潟の平和運動団体に譲渡しました。支部有志が模型の修復、輸送を担い新潟市での引き継ぎ式に参加、その模様を8月1日のNHK「目撃！」にっぽん」で放送されました。

墨田区立花に移り住まれた福地義直さんは、同じ広島被爆者の野崎七郎さんと協力し「リトルボーイ」「ファットマン」の二つの原爆の実物大模型を自費で製作しました。お二人とも一般市民で、ただ戦争の残酷さ、平和の大切さを訴えたいとの一念だけだったということです。そして、

福地さん亡き後は、「すみだ平和原爆写真展実行委員会」が主体となって二体の模型を管理・活用してきました。しかし墨田区内の保管所が使用できなくなったため、引き取り先を探すことになりました。

今までの所縁で 修繕と輸送を

リトルボーイの模型は江戸川区の被爆者団体に引き取られ、ファットマンの模型も多数から引き取りたいとの希望が寄せられました。管理者たちは感謝の思いにむせびながら選定を行ない、「原水爆禁止新潟協議会」に託すと決まりました。墨田支部はこれまでの所縁から模型の修繕と輸送を行ないました。ファットマン模型は全体黒色でしたが、

磯で行なった水爆プラボール実験でした。8分ほど後に地鳴りのような、足元から突き上げるような衝撃音。異常を感じた漁船長の指示で縄を揚げます。この光と音との時間差で、実験場から約160km離れていたことがわかります。船は風上にいるにもかかわらず、やがて光が見えた方角から雲の塊が追いかけてきます。雨は降り始め、白いものも一緒に降り落ちてきました。

海域汚染は広範囲

第五福竜丸以外にも被害

第五福竜丸の被災発覚に端を発したこの事件は、「第五福竜丸事件」と呼ばれることがあります。しかし被害は第五福竜丸だけにどまりませんでした。

有意義な活動の お手伝いできた

7月10日午後、模型を積んだトラックが無事に新潟市西区の引き渡し会場の公園に到着。式には、引き継ぎ団体の代表理事である赤井純治氏（新潟大学名誉教授）をはじめ県内各地で平和活動に励んでいるメンバーも多数集まりました。すみだ写真展実行委員会の湊武代表（被爆者団体墨田折鶴会会長）からは土建墨田支部にむけて感謝の言葉が述べられましたが、私はむしろ、こちらこそこのような有意義な活動のお手伝いできたことに感謝しています。



展示館に展示されている第五福竜丸

「もっと真剣に学んで」 核なき未来へ航海止めない

個別の補償ではなく、政府から政府に丸投げされた「見舞金」は慰謝料に名前を変えて関係各方面に分配されました。大石さんたち乗組員は一人平均200万円が渡され、全員が退院させられます。20歳の大石さんは核実験で職場を奪われ、仕事を失ったのです。ところが見舞金への周囲からの妬みや被曝に対する差別は激しく、いたたまれず故郷を離れ、再び東京へやってきました。そして海と

やない！たくさんの人が不安になり、怒り、立ち上がりました。当時日本は人口8000万人でしたが、3200万人を超える人が「水爆実験やめろ」「核兵器を禁止しろ」と署名したのです。米ソの核開発競争により続けられる核実験は、決して他人事ではなかったのです。盛り上がる原水爆禁止の運動は、米政府にとっては「反米運動」のきっかけになる恐れもあり、日米政府は解決にむけて外交交渉を展開しました。200万ドル（当時のレートで約2億7000万円）の見舞金で決着したのです。政府レベルでの「解決」は、ビキニ事件は終わったという「時代の気分」を作っていました。

海という大切な職場で自分と仲間たちの人生を狂わせた核兵器。その恐ろしさを知らない人たちが、あまりに多いのではないかと、焦がれる思いで「もっと真剣に学んでください。自分自身のことと怒ってください」と中学生、高校生たちに語っていた姿を想います。想像することしか、もう共鳴も共振することもない。展示館のまんなかにとっしりと座した第五福竜丸のそばで誓いをあらたにします。第五福竜丸の核なき未来への航海を止めないことを。大石さんと共に。